



朝比奈隆への強いライバル心 淡谷のり子とのコンビで数々のヒットをとばす

大正14年（1925）、大阪中央放送局（BK）が結成した「大阪フィルハーモニックオーケストラ」に入った18歳の良一は、常任指揮者のE・メンテルにかわいがられ、4年間にわたって言語に絶する厳しい彼の特別指導を受けます。

メンテルは京都帝国大学音楽クラブのオーケストラ指揮者も兼ねており、あるときそこでヴァイオリンをひいていた京大生の若者をつれてきて、「この男もキミに負けない才能がある。個人レッスンを付けてやることにしたから、仲良しくして」

と、良一に紹介します。この京大生がのちに大阪フィルの名指揮者として、長年大活躍する朝比奈隆です。隆は一つ年下の明治41年（1908）生まれ。戦後はベルリンフィルの定期公演はじめ、毎年のようにヨーロッパの各交響楽団でタクトをふり、晩年は世界最長老の指揮者として世界中から賞賛された人物です。

当時良一は大阪フィルでフルートとサクソフォンをまかされた演奏者でしたが、知的レベルのはるかに高い隆の芸術論にシャツポを脱ぎました。

「曲の解釈は指揮者次第だ。譜面をなぞっただけでは単なる木魂こたまにすぎぬ。芸術的に昇華させる指揮者に、演奏者は従えばよい」

と言い切るいかにも秀才らしい隆に、良一のライバル意識が火を吹きます。「よし！俺もおれメンテル先生や朝比奈君に負けぬ指揮者になってやる」と、目尻をつりあげます。

昭和8年（1933）大望をいだいた良一は、大阪フィルを退団し東京へ出て指揮者を目指しますが、無理でした。才能ではない。

名のあるオーケストラの指揮者は、東京音楽学校（現・東京芸術大学）出身者が独占しており、天王寺商業学校夜間課程卒業の彼には、入りこむ余地がなかったのです。

苦しい毎日を重ねた良一は、生活のため同11年「日本コンピア」に入社します。翌12年、会社はこの女性歌手の新曲を作ってくれないかと、いやに鼻っばしらの強い姉さんあねをひき合わせます。彼女が淡谷のり子です。

のり子は本名淡谷規のり、明治40年（1907）青森市の大きな呉服問屋に生まれました。幼いころは裕福でしたが大正末期の世界的不況をのりきれず生家は倒産。両親は離婚し母は青森県立高女を卒業したばかりののり子と妹をつれて上京します。東洋音楽学校（現・東京音楽大学）音楽科を首席で卒業したのり子は、全国の音楽学校卒業生コンクールで最

優秀賞に選ばれ、「10年にひとり出るか出ないかのソプラノ歌手だ」と絶賛されます。

しかし母親と妹を養うためには、収入の少ないクラシックでは無理です。やむなくポリドールに入社しますが、ブライドが高い。先輩歌手でも平気で歌唱力のなさを指摘する。作曲家が与えた曲に、「変ね。そこは8分音符でしょ」と文句をつける。たちまち鼻つまみになって追いだされ、この年コロンビアに移ったばかりでした。コロンビアはこの天才ソプラノ歌手に新曲の流行歌を歌わせ、売り出すつもりでしたが、誰もが尻こみする。それでお鉢が新人の良一に回ってきたわけです。

のり子はお天気屋でも有名です。おまけにいわゆる演歌が大嫌い。同年齢であるのに初めて会った良一を小馬鹿にし、まるで女王様のように鼻先きであしらいます。良一は冷や汗をかきながら、ありったけの智慧をしばって作曲した「雨のブルース」を差しだしますが、彼も男です。これで文句があるならほったをひっぱたいて、会社をやめてやる…と力んだと伝えます。

譜面をひと目見たのり子は、感嘆の声をあげました。今までの日本の歌謡曲界には、まったく無かった新鮮なメロディだったのです。続いて「服部くん、お願いね」と今度はウイंकまでして頼まれた「別れのブルース」は、のり子が瞳をうるませて熱唱、また熱唱したため、空前の大ヒット作になりました。

窓をあければ

港が見える

メリケン波止場の

灯が見える…

昭和12年といえば「廬溝橋事件」(中国の北京南で演習中の日本軍が銃撃された事件。日中全面戦争の発端となる)が起こった年です。不幸な戦争に傾斜していく暗い軍国ニッポンの隅々にまで、この物悲しいメロディはしみ渡っていきました。

柳の下にどじょうは何匹もいます。「君忘れじのブルース」「東京ブルース」と、のり子・良一のコンビは次々にヒット作をとばし、淡谷のり子は「ブルースの女王」だと絶賛されるようになります。

服部良一が作曲した主な作品

- ・東京ブギウギ・銀座カンカン娘・青い山脈・東京の屋根の下・買い物ブギ
- ・グランドワルツ・山のかなたに・山寺の和尚さん など

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞